

『波について』における愛とエネルギーの力学

—Gary Snyder の愛についての一考察—

塩 田 弘

序

スナイダー (Gary Snyder) の中期の詩集『波について』(*Regarding Wave*, 1970) では、自然界の様々な活力や、彼の結婚や長男の出産といった幸せな家庭生活が詩の題材となっている。これらの題材を通じて、この作品の中では従来の枠組みに収まらない「エネルギーの交換」に基づく独自の愛の概念や思想が描かれている。それは、詩人の自然観と生命観の深まりと、熱力学などの科学的根拠によって支えられたものであり、特に家庭の中での人間の愛を自然界の営みのひとつとして温かい目で見つめている。スナイダーの描く愛は、自我の認識に基づく魂と肉体に関する宗教的、文学的な従来の西洋に伝統的な愛とは異なり、自らを生きとし生ける生成発展する生命体としてとらえ、自然との共生の思想に基づく新しい愛である。本小論では、スナイダーの詩にみられる自然な生き方に基づく独自の愛の概念と、その構造を探る。

1

スナイダーは、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) の作品をすべて読み、大きな影響を受けているが、ロレンスの詩集『鳥、獣、花』(*Birds, Beasts and Flowers* 1923) を読んだ時に、「よし、詩に転向しよう、現代詩に」と思い、詩の創作をはじめたと述べている (スナイダー「詩と仏教」221)。スナイダーは『波について』の前年に出版されたスナイダーの散文集『地球の家を保つには』(*Earth House Hold* 1969) では、彼が日本に向かうタンカーの船上で、ロレンスの小説『アロンの杖』(*Aaron's Rod* 1922) について思いを巡らせながら、独自の愛の概念について述べている。

ロレンスと彼のとほうもない、正確な、一方的な、直感。アメリカ・インディアンとポリネシア人は偉大な文化を発展させ、しかもほとんど意識的に人口をおさえていた。またさらに、「愛は不可解な人間精神の過程だ。愛はまた不可解であるがいぜんとして過程にしかすぎない。この過程は完成に向かって働くべきもので、魂と体がついにはほろぼされてしまうような集中と極端の恐怖に向かうべきではない。愛の過程の完成とは、男と女が、純粋な、本来の自分に達すること。それだけだ。」(*Earth House Hold* 32)

ロレンスの愛について、馬本は「ロレンスが我々読者にその愛の世界を通じて開頭してくれた生命の源に触れることにより、我々は、いままで以上に充実して生きることへのヒントをそ

こから学びうる」(335)と述べた。既成の愛にとらわれない生命の本源に基づく愛の可能性を探るロレンスと彼の作品について、スナイダーは「とほうもない、正確な、一方的な、直感」と述べる。さらに、「アメリカ・インディアンとポリネシア人が偉大な文化を発展させ、しかもほとんど意識的に人口をおさえていた」とスナイダーは述べる。西洋文明とは異なる偉大な文化に対する称賛であり、生態系の収容力を維持しうる範囲内で偉大な文化を発展させた民族の生活スタイルに敬意を示している。先住民のように地球と人間が調和を保った生き方をしていくことが、人間中心ではない愛のある生き方であることを示唆している。

スナイダーはさらに愛を「不可解な人間精神の過程」と述べる。人間の精神は、神秘的で不可解な側面が多分に残されているが、哲学的アプローチに加え、様々な科学的解明が進んでいる。二十世紀前半から始まった波動力学の研究(1926年のシュレディンガーによる論文)は、人間の精神の構造が地球の自然原理に基づいていることを示唆している(ペンローズ 237-8)。すなわち、精神とは自然の摂理に基づいた神秘に満ちた不可解なものなのである。そして、愛が「過程」であることをスナイダーは強調する。プラトンに始まり、後の時代に展開されたエロスの愛の概念は、あまりにもしばしば死の概念と結びつく(渡部 3)。スナイダーは、このようなエロスの愛とは異なる新しい愛を探求する。それ故「魂と体がついにほろぼされてしまうような集中と極端の恐怖に向かうべきではない」とスナイダーは述べる。人間を特別な存在と見なす従来の愛ではなく、自然の摂理と人間本来の営みに基づいた「過程」としての愛をスナイダーは探求する。それはスナイダーがインタビューで次のように述べていることから明らかである。

我々はこの星で何をしようとしているのか? それは愛の問題である。西洋の人間中心的な愛ではなく、動物や岩や土やすべてのものに及ぶ愛である。この愛がなければ、たとえ戦争が起こらなくても、住めない場所のために我々は死に至るかもしれない。(The Real Work 4)

このように、人間中心的な愛ではなく、地球の生態系に根ざした愛の復権をスナイダーは唱えるのである。このような愛に対する考え方は、スナイダーの詩に何度も繰り返されている。その中で『波について』の「愛」という題名が付けられた詩には、自然の中での愛が歌われている。

Love

Women who were turned inside-out / Ten times over by childbirth / On the wind-washed lonely islands / Lead the circle of *obon* dancers / Through a full moon night in August / The Youngest girl last ;/ Women who were up since last night / Scaling and cleaning the flying fish: / Sing about love. / Over and over, / Sing about love. / *Suwa-no-se Island* (50)

愛

子供十人産んで 腹んなか 十回 / ひっくり返された女たち / 風吹き寄せる淋しい孤島で / 盆踊りの輪の 先頭を勤める / 八月、満月の夜、一晩中 / 一番若い娘は しんがりだ。 / ト

ビウオの鱗落としをししたり 腸を取ったりして / 昨夜からいっすいもしていない女たちが / 愛について歌う / 何度も何度も / 愛について歌う。 / (諏訪之瀬島¹⁾)

この詩で描かれている愛は、「ロマンティックな愛」とは異なる。オカダは、この詩に描かれた愛は、禅の「空」を明示しようとするものであると述べる (Okada 210)。しかし、この詩には禅の「空」の概念以上に、地球上の人間の営みが愛として描かれている。詩の冒頭で、子供をたくさん産んだ女が盆踊りの輪で先頭になり、一番若い娘が一番後ろになる様子が描かれている。毎年繰り返される祭りのなかで、この順番は、次の世代へ生命の引継を象徴している。この祭りの列が象徴するものは、スナイダーが『地球の家を保つには』で述べた「愛の過程」のひとつである。ポール (Sherman Paul) は、『波について』のかなでは、「女性としての自然が歌われていて、従来の特定の女性を神聖化する流行のロマンティックの愛ではなく、女性自身を女神として描いている」と述べた (76)。また、田中によると、詩集の題名ともなっている “Regarding Wave” では、“Wave” と “Wife” は語源的、意味的に近く、この二つの単語は近いものであり、“wife” は創造のエネルギーとして位置づけられている (55-7)。このように、女性を神秘的に崇拝するスナイダーの態度が、この詩にはあらわれている。これは、女性を男性以下の存在に貶める文明社会での「女性の神秘性²⁾」ではなく、男女を同じ視点で捉えた上で、生態的想像力に基づいた女性の神秘性をうたっているのである。

「愛」の詩で描かれているのは、トビウオの鱗落としをししたり腸を取ったして食べ物を準備する女達であり、彼女たちは人間の営みを司る豊穡の女神である。ステューディングは、ロレンスとスナイダーが共に、女性を生命の源だと捉えていると指摘するが (143)、この詩では、生命の源である女たちが、愛について何度も何度も歌うのである。スナイダーは、女性を生命の源と捉えることで、自然と人間との接点を見出すが、それは父権制の歴史と共に進行した自然征服の概念とは異なり、自然の摂理に基づいた考え方である。さらに、「魂と体がついにはほろぼされてしまうような集中と極端の恐怖に向かうべきではない」と『地球の家を保つには』に書かれているように、束縛や一方的な支配関係に基づく愛や、しばしば死の概念と結びつけられるエロスの愛ではなく、人間の自然な営みに支えられた愛が歌われる。それは決して人間中心の愛ではなく、地球上のすべての営みに及ぶ愛である。人間が自然の中の生物的次元に還元されるのは、男が純粹な雄に、女が純粹な雌になることであり、愛は、そのための大事な手段である。近代文明から遠く離れた小さな島の盆踊りで生き生きとした女性達を描くことによって、スナイダーは、自然な生き方に基づく愛のあり方を探求している。

スナイダーの愛の概念は、ロレンスと共通する点がある一方で、両者には相違点がある。それは、ロレンスが最終的に目指したものは、他者との感応関係によって成就を勝ち取ることであるのに対して (Leavis 103)、スナイダーの愛には、男女の結合にとどまらず、地球の環境

と人間との調和のとれた世界の回復を目指している点である。確かに、ロレンスの作品には美しい自然描写に彩られていて、一種の自然崇拜心が描かれている（飯田 99）。しかし、スナイダーは、科学の理論などを取り入れることによって、地球的な想像力をさらに発展させ、人間を地球の生態系の一部に位置づける。そして、独自の愛を探求するのである。それは、次に取り上げる「味覚の歌」(Song of the Taste) にあらわれている。

2

『波について』では、自然な人間の営みに基づく愛が描かれているが、「味覚の歌」では、人間の食べる行為が描かれている。そして、食べる行為の延長上に、恋人とのキスが描かれる。

Song of the Taste

Eating the living germs of grasses / Eating the ova of large birds / the fleshy sweetness packed / around the sperm of swaying trees / The muscles of the flanks and things of / soft-voiced cows / the bounce in the lamb's leap / the swish in the ox's tail / Eating roots grown swoll / inside the soil / Drawing on life of living / clustered points of light spun / out of space hidden in the grape. / Eating each other's seed / eating / ah, each other. / Kissing the lover in the mouth of bread: / lip to lip. (17)

味覚の歌

草の中にある生きた胚珠を 食べる / 大きな鳥の卵子を 食べる / 揺れる木々の精虫のぐるりに / 詰め込まれた 多肉質の甘味 / 優しい声をした 雌牛たちの / 脇腹や太いもの筋肉 / 子羊の跳躍の中に潜む活力 / 雄牛の尾が空を切る音 / 地中で肥え太った / 植物の根を食べる / みな が 生きているものの命に頼っている、 / 葡萄の種のなかに隠された / 宇宙から紡ぎ出される / 光のかたまり。 / おたがいの種を食べあい / ああ食べあう / お互い同士を。 / パンを食べている恋人の口にキスをする / 唇に唇を。 /

スナイダーは、植物の胚種や鳥の卵子、牛や羊の肉、葡萄などの栄養の詰まった食べ物を、「宇宙から紡ぎ出される光のかたまり」と述べている。食べ物が宇宙から紡ぎ出される光のかたまりだと述べるのは、彼の科学理論に基づく独自のエネルギーに対する解釈が反映されたものである。ステューディングは、スナイダーが当時のエネルギーに関する科学の学術書の影響も受けているが、彼のエネルギーに対する解釈は独自のものとしている³⁾ (Steeding 132-4)。すなわち、太陽は宇宙空間に存在するエネルギーの固まりであり、太陽のエネルギーは太陽光線として地球上に届く。それは植物の光合成によってエネルギーの固まりとなる。それは草食動物の糧となり、さらに肉食動物がそれを食べて活力とする。地球上の植物連鎖の中で、すべての生物はお互いに支え合っている生きているのである。あらゆる生命活動は、エネルギーに支えられているが、それは「エントロピー水準の復元」(植田 55) であると説明できる。すなわち、動物の場合、食べた物のエントロピーが大きくなる時に出てくるエネルギーを吸収して生きている、エントロピーが大きくなったものは廃熱や排出物として捨てられる。それを

補充するために、動物は絶えず環境から物を取り入れなければならない。それらは、地球上の自然界では、精密な食物連鎖によって循環が成り立っている。スナイダー自身、「この食物の連鎖の中で私はどこにいるのか？」（『地球の家を保つには』61）と述べているが、彼は『波について』では、人間の活動のすべてを食物連鎖の中に位置づけている。人間は地球上で超越した存在ではなく、地球全体の一部分なのである。

人間は、他の地球上の生物と同様に、エネルギー交換の連鎖のなかにあるが、それは食べ物によってのみ成り立っているのではない。地球上の様々な活力や、他者との交感によってもエネルギーの交換をするのである。詩の最後に、「パンを食べている恋人の口にキスをする 唇に唇を」と述べられているように、スナイダーは恋人とのキスによって、生きる糧としてのエネルギーを交換する。それは食べ物を食べる行為と同じように、恋人と口づけをし、恋人との愛によって活力を得るのである。それは人間に与えられた特権ではなく、大地と動植物を含むすべて存在の全体性の中で、その営みに基づいた行為である。人間とは、そのアイデンティティーを他の生命種の地位と役割へと交感的に展開させる存在であり、そうすることで人間は地球上の生物の一員となるのである。「味覚の歌」で、「おたがいの種を食べあい / ああ食べあう / おたがい同士を。」と述べられるように、人間の存在も、お互いにとってエネルギーであり、おたがいにそれを交換して、「食べあう」のである。もともと光のかたまりだったエネルギーが人間の体や活動源となり、お互いに交流することによってエネルギーを交換し、おたがいの新たな活力となす。

「この食物の連鎖の中で私はどこにいるのか？」というスナイダーの問いかけに対して、彼は結婚して家族を持った時に、さらなる答えを見つける。彼は家族の中に、連鎖の中での居場所を見つけるのである。スナイダーにとって、家族がエネルギーのネットワークであり、妻がエネルギーを与える存在だとステューディングは述べたが（135）、家族はお互いにお互いのエネルギーを交換する存在である。「燃える島」“burning Island”（Regarding Wave 23-4）という詩の中で、スナイダーは「新月の出る日に／この火口のふちで／結婚のちぎりを結ぶ」と述べている。この詩においても、自然界の活力は「流れ／渦巻きよ／そして／自然の中の／様々な活力よ」と述べられているが、スナイダーと妻となるマサとの愛の契りは、自然界の様々な活力の一つとして捉えることが可能である。二人の結婚の契りは、新月の宇宙からのエネルギーと、火山の地球のエネルギーと交響して、エネルギーネットワークとしてのさらなる活力が与えられるのである。

やがて二人は結婚して長男カイが生まれる。「家を出ないで」という詩では、長男が生まれて、新しい命をあたたく育むスナイダーの家族の様子が描かれている。

Not leaving the House

When Kai is born / I quit going out / Hang around the kitchen---make cornbread / Let nobody in. / Mail is flat. / Masa lies on her side, Kai sighs, / Non washes and sweeps / We sit and watch / Masa nurse, and drink green tea. / Navajo turquoise beads over the bed / A peacock tail feather at the head / A badger pelt from Nagano-ken / For a mattress; under the sheet; / A pot of yogurt setting / Under the blankets, at his feet. / Masa, Kai, / And Non, our friend / In the green garden light reflected in / Not leaving the house. / From dawn til late at night. / making a new world of ourselves. / around this life. / (*Regarding Wave* 34)

家を出ないで

カイが生まれた時 / 外出を止めた / もっぱら台所で ぶらぶらした---トウモロコシ・パンを / 作ったりして / 誰も中に入れなかった。 / 郵便物も無味乾燥だった。 / マサは横を向いて寝ている、カイがため息をつく、 / ノンが洗濯し 掃除もしてくれる / ほくらは座って マサが乳をやるのを / ただじっと見ている、そして 緑茶を飲む。 / ナバホのトルコ石のビーズを ベットに掛けて / 頭のところにはクジャクの尾の羽根 / シーツの下にはヨーグルトの道具一式、 / これはカイの足下へ。 / マサ、カイ、 / 友達のノン / 庭から射し込むみどりの光の中、 / 家を出ないで / 明け方から夜遅くまで / この「いのち」を囲んで / ほくら自身の新しい世界を作る。 /

この詩では、あたらしい命を大切にあたたかく見守りながら、庭からのみどりにはねかえった太陽の光を浴びてゆっくりと生きていくスナイダーの家族の様子が描かれている。ここで、家族はエネルギーのネットワークとしての役割を果たしている。毎日の食べ物を作り、お互いの存在がお互いの生きる糧となっている。「明け方から夜遅くまで、この「いのち」を囲んで、ほくら自身の新しい世界を作る」と詩の最後に書かれているように、息子の存在によって、家族に新しい活力が生まれ、新しい世界が作られるのである。子育ては、単に子供の世話をするのではなく、新しい命を育むことで、全員が生きる力を与えられているのである。食べ物から生きる力を摂取するように、様々な活力を受け入れることによって、生きる力が支えられ、同時に、他人に活力を与えるのである。これは、すべてのものは他のあらゆる物につながっているとする「エコロジーの第一法則」(Rueckert 108)にも共通する。

3

スナイダーの詩のスタイルについても、自然界のエネルギーを反映させ、人間に活力を与えるものとなっている。『波について』に収められた多くの詩の行や連が、潮の満ち引きを象徴するような配置になっている。このような傾向はスナイダーの他の詩集にも見られるが、特にこの詩集において強調され、その活力のある表現法によって、詩のテーマを達成しようとしているとポールは述べる (Paul 77)。「味覚の歌」や「家を出ないで」、そして後に取り上げる「それ」「IT」にもみられるように、スナイダーの詩は、行や連の配置によって視覚的に波を連想させるべく工夫されている。同時に、マーティンは、『波について』に収められた「波」

(“Wave”), 「波について」 (“Regarding Wave”) の二つの詩を取り上げて、これらの詩にはパターン化された比喩構造があり、それは繰り返し、循環することによって、詩の主題を如実に表現しようとしていると分析する (Martin 207-8)。スナイダーは、視覚的效果だけではなく、規則的な繰り返しによる音声的效果や、意味的な反復によるイメージ連鎖によって、詩を波のイメージとして喚起させるのである。

スナイダーにとっての波は、自然界の活力を象徴するものであり、詩のスタイルを波に擬えることによって、詩を人間に活力を与える存在とするのである。スナイダーにとって、波は自然理解であり、様々な波をほめたたえているとポールは述べる (Paul 77)。一方、リュカートは、文学とエコロジーの関連について論じた際に、「詩はエネルギーの一部であり、生命を支える道しるべである」と述べた (Rueckert 108)。詩人から流れ出す言葉によって編まれた想像力が詩であり、詩を読むことによってエネルギーが読者にエネルギーの移動をもたらすとリュカートは続ける (109-110)。熱力学の第一法則によると、エネルギーは勝手に作られたり壊されたりするものではなく、エネルギーの増加は、外から加えられた仕事量と熱量に等しい。従って、エネルギーを蓄えた詩は、無から生み出されるものではない。リュカートは、文学のエネルギーは、一般的な他のエネルギーとは異なることを示唆している (109)。しかし、スナイダーの想像力は、地球上のエネルギーの交換 (熱力学の第一法則) に的確に基づいていて、外部から得たエネルギーによって生み出されている。その外部からのエネルギーとは、「味覚の歌」や「外に出ないで」で書かれたような、食べ物や、家族かどから得たエネルギーである。スナイダーの詩を書く行為はエネルギー交換の延長線上にあり、エネルギーの交換がスナイダーにとって愛の核心なのである。

以上のような考え方をを読みとることができる作品が、『波について』に収められた“IT”という詩である。一見、恣意的に見える活字の並び方は、全体を見ると波のようなかたちであり、視覚的な効果が大きいので、原文のままに引用する。

IT

【Reading Blake in a cowshed during a typhoon
on an island in the East China Sea】

Cloud---cloud---cloud--- hurls
 up and over ;
Bison herds stamp-
peding on Shantung

Fists of rain
 flail half down the length of the floor

Bamboo hills
bend and regain;
fields follow the law of waves.

puppy scuds in wet
squats on the slat bed
— on the edge of a spiral
Centered five hundred miles southwest.

Reading in English:
the way the words join
the weights, the warps,

I know what it means.
my language is home.

mind-fronts meeting
bite back at each other,
whirl up a Mother Tongue.
one hundred knot gusts dump palms.
over somebody's morning cream---

Cowshed skull
Its windows open
swallows and strains
gulfs of wild-slung
quivering ocean air.
breathe it;
taste it; how it

Feeds the brain. (42-3)

それ

【東シナ海の島で、台風の間ずっと牛小屋でブレイクを読んでいる】

雲---雲---雲--- 上空一面にたたきつける / 野牛の群が薄い絹の表面を踏みならず / こぶしのような雨粒が 床下の半分の高さまでまで跳ね返る / 竹の丘が曲がって、また元に戻る / フィールドは波の法則に従う / ぬれた子犬が飛ぶように走り / 五百マイル南西に中心をなすらせんの縁では、うずくまる / 単語のつながり方、音節、状況を英語で読む / 私はそれが意味することを知っている / 私の言語が中心地 / 心の前線が / 互いに食いつき食べあう / 母国語が渦を巻く / 百ノットの突風が掌に打ち込み / だれかの朝の体液になる--- / 牛小屋の頭 / その窓口が開かれて、 / 吸い込み ピンと張る / 自然に垂れ下がった湾で / 海の空気が震え / 吸い込み / 味わい どうするか / 頭脳に糧を与える。

この詩の冒頭では、「台風の日、東シナ海上の島でブレイク (William Blake) を読んでいる」と述べられている。スナイダーは、ブレイクについては『亀の島』(Turtle Island, 1974)でもふれ、ブレイクの言葉「エネルギーは永遠の喜び」(“Energy Is Eternal Delight”)を引

用している (*Turtle Island* 211-2)。ここでスナイダーは、「ロス・アンジェルズへの電力はエネルギーではない」とも述べているが (*Ibid.*)、スナイダーにとってエネルギーとは、自然界の法則に基づいた愛、すなわち自然の摂理に基づいた活力の交換によってのみ成り立つものである。

次に、“IT”の第一連の後半で、台風による雲のうねりや、竹が風にしなる状況を書いた後、「フィールドは波の法則に従う」と書かれている。「フィールド」とは、目の前で波のようになっている竹林だけではなく、広く人間の世界も指している。波の法則が当てはまるのは、人間の愛を含めた自然界のすべてであり、活力の交換によって、その営みが成り立つのである。

“IT”の第一連では島の台風の様子が中心に描かれているが、次の第二連では詩に描かれる事柄は別の場面に移る。この点について、マーフィーは次のように述べる。

詩の次の部分では、スナイダーは熱帯の嵐から、手に持っている本と著者と読者の関係に注意を切り替える。嵐に没頭することが経験であるのと同じように、テキストにも没頭するのである。台風を引き起こす気象前線のように、「心の前線」が「お互いにかみ合う」。この行を通じて、第一連で述べられた「子犬」がスナイダー自身につながっている。両者は「嵐」に反応している。一方は台風であり、一方はブレイクの詩である。(Murphy 104-5)

マーフィーが述べるように、ブレイクの詩は、台風と同じ「嵐」であり、波の一形態としてエネルギーを伝える活力である。スナイダーはブレイクの詩を読み、その活力に反応する。牛小屋にいるスナイダーの「頭の窓口」、すなわち視覚や聴覚などの五感によってエネルギーに感応し、そのエネルギーの波をありのままに受け入れることによって、スナイダーは詩的想像力を得て、「頭脳に糧を与える」。自然界の活力と同様に、ブレイクの詩のエネルギーによって、スナイダーは新たな活力を得るのである。量子力学の「場の量子論」によると、すべての力は粒子の交換として説明でき、すべての粒子は粒子と波の性質を合わせ持つ (米谷 132)。このような概念を、東洋の神秘思想や現代思想とも重なる考え方だと田中は述べている (田中 58)。スナイダーの思想は、科学や哲学や宗教などの様々な要素によって成り立っていて、特に科学理論を神秘的に再編成するのである。スナイダーの思想について田中は次のように述べる。

このようなスナイダーの考え方に立つと、私達はいわば波のような存在であり、流れている存在である。波というのはひと続きである。つまり、人間も、貝も、大理石も、木も、砂丘も、サボテンも、縞馬もひとつながりの存在である。各々が離絶した孤立した存在ではない。すべてがつながり合い、循環している。すべてが網の目のように、相互にささえ合っている。循環して流れているということは、すべての存在が生きているということである。生命があるということである。(58)

地球上のあらゆる存在は、波のような存在であり、相互につながっている。スナイダーの詩

は、このような思想を再現したものである。そして、自然界でのエネルギーの交換を愛として捉え、それを人間の精神的な活動にまで展開させ、家族愛や異性愛を、神聖さを帯びた物語として語るのである。

結び

スナイダーは、エネルギーに関する科学理論などによって、D. H. ロレンスの愛の概念を発展させ、新たな可能性を探った。エネルギーの交換の媒介である波は、『波について』の詩の中で意味的、形式的に何度も用いられ、自然界の様々な活力を最もよく象徴するものである。愛も自然界の活力であり、個体の生存を可能にする物理的、精神的なエネルギーの交換の手段である。詩を書く行為も、他人にエネルギーを伝えることであり、ひとつの愛のかたちである。詩で描かれたスナイダーの日常の生活も、自然界の循環の中にあり、家族の間でのエネルギーの交換が描かれている。このように、『波について』では、地球の生態系を基盤としたあらゆる次元での自然な活動が、エネルギーの交換という概念に基づき描かれるのである。

注

- 1) 「愛」「味覚の歌」「家を出ないで」の訳は、金関寿夫、加藤幸子(訳)『スナイダー詩集ノー・ネイチャー』を参照した。
- 2) 文明社会においては、「女性の神秘性」は男性の側からの女性支配に結びついていると指摘される。「女性の神秘性」のイメージによって、女性は低次元の存在として生きることが強いられているとフリーダン (Friedan, Betty) は述べている (307)。
- 3) ステューディングは、スナイダーのエネルギーに関する考え方は、フリーマン・ジョン・ダイソン (Dyson, J) のエネルギーに関する記述に共通していると指摘している (Studing 132)。量子電気力学で大きな功績をあげたダイソンは、「次の世紀の科学者がエネルギーをどのように定義するか知らないし、どのような未知の専門用語で論じるのか知らないが、物理学者達がどのような言葉を使おうとも、ブレイクを否定するに到ることはないだろう。エネルギーはある意味で、生命の創造主であり、生命の贈与者のままであり、我々の数学的記述を超越したものである。その本質は、生物の存在しない宇宙のなかで、生き物としての我々の存在の、神秘の中心にあるのだ」(Dyson 19) と述べている。

引用・参考文献

- Dyson, J Freeman. *Energy and Power*. San Francisco: A Scientific American Book, 1971.
Friedan, Betty. *The Feminine Mystique*. 1963. New York: A Laurel Book, 1984.

- Leavis, F.R. *D.H.Lawrence: Novelist*. London: Chatto&Windus, 1955.
- Martin, Julia. "The Pattern which Connects: Metaphor in Gary Snyder's Later Poetry." *Critical Essays on Gary Snyder*. Ed. Murphy, Patrick D. Boston: G. K. Hall & Co., 1991. 188-210.
- Murphy, Patrick D. *Understanding Gary Snyder*. Columbia: U of South Carolina P, 1992.
- Okada, Roy Kazuaki. *Zen and the Poetry of Gary Snyder*. Diss. U. of Wisconsin, 1973. Ann Arbor: UMI., 1982.
- Paul, Sherman. "From Lookout to Ashram: The Way of Gary Snyder." *Critical Essays on Gary Snyder*. Ed. Murphy, Patrick D. Boston: G.K.Hall&Co., 1991. 58-80.
- Rueckert, William. "Literature and Ecology." *The Ecocriticism Reader*. Eds. Glotfelty, Cheryl & Harold Fromm. Athens: The U of Georgia P, 1996. 105-123.
- Snyder, Gary. *Earth House Hold..* New York: New Directions, 1969.
- _____. *Regarding Wave*. New York: New Directions, 1970.
- _____. *The Real Work: Interviews & Talks, 1964-1979*. New York: New Directions, 1980.
- Steuding, Bob. *Gary Snyder*. Boston: Twayne, 1976.
- 飯田武郎 「D. H. ロレンスと自然崇拜心」【D. H. ロレンスと現代】 日本ロレンス協会 (編) 東京, 国書刊行会, 1995年 99-109.
- 科学者人名事典委員会 【科学者人名事典】 東京, 丸善, 1997年
- 馬本誠也 「新しい【愛】は可能か---ロレンス文学における【愛】のゆくえ---」
【愛のモチーフ】山形和美 (編) 東京, 彩流社, 1995年 319-336.
- ペンローズ, ロジャー, 中村和幸 (訳) 【心は量子論で語れるか】 東京, 講談社, 1999年
- スナイダー, ゲーリー. 「詩と仏教」杉山和芳 (編・訳) 【ビート読本 ビートジェネレーション】 東京, 思潮社, 1992年 217-225.
- _____. 金関寿夫, 加藤幸子 (訳) 【スナイダー詩集 ノー・ネイチャー】 東京, 思潮社, 1996年
- _____. *Turtle Island*. 1974. (対訳) ナナオサカキ 京都, 山口書店, 1991年
- 田中泰賢 【ゲイリー・スナイダーの愛語】 東京, 英潮社, 1992年
- 樋田 敦 【エントロピーとエコロジー】 東京, ダイヤモンド社, 1986年
- 米谷民明 「弦理論は究極理論となるか」【科学十大理論】 東京, 学習研究社, 1996年 128-141.
- 渡部昇一 (編) 【ことばコンセプト事典】 東京, 第一法規出版, 1991年

Dynamics of Love and Energy in *Regarding Wave* : A Study of Gary Snyder's Love

Hiroshi SHIOTA

The objective of this paper is to examine Gary Snyder's views on love in *Regarding Wave* with special attention to his attitudes toward nature and his scientific thinking.

In *Regarding Wave*, Snyder tries to locate the element of love within the conversion of energy through biological imagination. He observes the behavior of the human race, and he holds females, in great esteem as the source of the energy. Snyder's idea of love is not based on the traditional concept of love in the Western world, but it is an extension of the act of eating. For him, his partner and family are an energy network that supplies him with vitality. Love is the most important process of exchanging energy which is not privileged to humankind. Accordingly, Snyder extends the identity of human beings into the roles of other life forms on earth.

This idea is supported by his detailed understanding of the natural world. There are some scientific theories behind his literary imagination; the first is quantum mechanics, the fundamental theory used by 20th-century physicists to describe atomic and subatomic phenomena. According to the quantum theory, the conversion of energy is caused by wave patterns in the natural world, so on many occasions, Snyder uses waves metaphorically in the poems both in their contents and in their forms. Even more important is thermodynamics, the branch of physics that studies the transfer of heat and the interconversion of heat and work in various physical processes. Snyder's imagination is also transferred from the external energy according to the first law of thermodynamics. Therefore, his creative activities are located in the working of nature, and his poems store wave like energy which is transmitted to his readers.

Love is an essential part of the flow of his scientific energy and the idea that one organism is linked to another, and then another is the most important part of his thought project. Snyder locates human beings as merely a part of the totality of the environment rather than at the center of the world.